

音  
まち  
千住の縁  
…(・)…

音  
まち  
千住の縁

2011-2013

OTOMACHI-SENJU-NO-EN

- 03 [Message] まちを動かす力を秘める「音まち」 | 舟橋左斗子
- 04 まちが音楽になる日 | 白坂ゆり
- 06 「街」で「音」が広まっていく／「音」が「街」を形成していく、その可能性 | 畠中実
- 08 [Director's Message] 縁もゆかりも | 清宮陵一

- 10 大友良英 + チーム・アンサンブルズ | 千住フライングオーケストラ
- 14 大巻伸嗣 | Memorial Rebirth 千住
- 18 野村誠 | 千住だじやれ音楽祭
- 22 足立智美 | ぬお／ジョン・ケージ「ミュージサーカス」
- 26 スプツニ子！ | ADACHI HIPHOP PROJECT
- 29 ASA-CHANG | 音まち子どもバラダイスオーケストラ
- 30 大巻伸嗣 | イドラ
- 32 やくしまるえつこ | 放送・時報／奉納朗読会
- 34 八木良太 | (Another) Furniture Music ——(別の) 家具の音楽
- 36 岩井成昭 | イミグレーション・ミュージアム・東京 —不思議な出会い—
- 38 未来楽器図書館
- 42 千住ミュージックホール
- 44 音まちトーク
- 46 [Program Officer's Message] 本書へ寄せて | 長尾聰子
- 47 [Producer's Message] ADACHIへの想いを託して | 熊倉純子
- 48 アーティスト・プロフィール

\* すごく「音まち千住農園」

「ヤッチャイ隊」に聞く／主催事業の開催概要&プロジェクト運営メンバー

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」とは



「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」(通称「音まち」)は、平成24年度の足立区制80周年記念事業をきっかけとして、足立区にアートを用いた新たなコミュニケーション(縁)のつながりを生み出すため、東京都・東京文化発信プロジェクト室・東京藝術大学音楽学部・NPO法人によるネ・足立区の連携のもと展開している、市民参加型の“まちなかアートプロジェクト”です。本プロジェクトは平成23年9月より本格的に活動を開始しました。足立区千住地域を舞台に、大友良英、大巻伸嗣、野村誠ら各地でアートプロジェクトの経験をもつアーティストが中心となって、まちなかの担い手とともに“音”をテーマとしたプログラムを展開しています。

## Message

### まちを動かす力を秘める「音まち」

「人」だと思う。一番大事なのは「人」。まちは人で構成されるものだから。

昨年、「音まち千住の縁(音まち)」のサポーター「ヤッチャイ隊」の話を聞いた。一人ひとりのこれまでの人生と現在の「音まち」への思いを聞いてしみじみ感動したのだけれど、その中に「千住に、自分の店を持ちたいと思い始めている」と話した人があった。音をテーマにしたちょっととんがったプロジェクト。魅力を感じてそこに集まってきた個性的でしかも能力ある人たちが、「音まち」はもちろんだけど、千住のまちにも興味を持ち、千住を好きになり、千住をベースに動き始めている……。「音まち」に関わる人たちと話をすると、わくわくする。

足立区がシティプロモーション課を創設したのが2010年。「とにかく何かやらなきゃ」と千住のまちに飛び出し、「まちなかアートプロジェクト」なんて新分野に乗り出せたのは、現在共催として名を連ねる、東京藝術大学音楽学部千住キャンパスの熊倉研究室と東京文化発信プロジェクト室「東京アートポイント計画」のノウハウ、そして熱いハートがあったからこそだ。

しかし、実際に動き始めてみると、行政が経験したことのないことばかり。深夜に至る会議の数々、まちの方から叱られた数々、アーティストとのトラブル、チラシやのぼりの考え方方が180度違って何度も大喧嘩したこと……。たった3年の間にいろいろなことがあったけれど、身を粉に動き回ってくれた事務局、NPO法人やるネの面々のがんばりのもと、今、少しずつ千住のまちが動き始めているのを感じる。「千住は、藝大があって、ちょっとオモシロイコトやってるまち」。そんな新しいイメージができつつあると思うのは、ちょっとひいき目過ぎるかしら？

そして、昨年末の忘年会には、町会やPTAの方々にも何人も参加いただき、なんと「来年は音まちをもっと盛り上げるぞ！」と自ら発言してくださった！ いろんな「縁」がつながり、老若男女、区内外から、元気と笑顔が湧き上がってくる。

世のイベントにはいろいろあるけれど、継続してまちに入り込み、こんなにじわじわと人をつなぎ、輪を広げ、まちを動かす力を秘める「音まち」は、手前味噌ながらちょっといいんじゃないかな。そう思っている。

## 白坂ゆり しらさか・ゆり [アートライター]

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」との縁は、ウェブサイト『CINRA.NET』でのスプツニ子！と野村誠への2012年のインタビューがきっかけで始まった。千葉県松戸市出身の私には、同じ常磐線沿線の北千住には馴染みがあったが、足立区をベースとするヒップホップのラッパーたちの活動は、スプツニ子！から聞いて初めて知った。地域の潜在力を引き出した好例といえる。

野村の取材は、「音う風屋」で行った。向かう途中、路地の先から摩訶不思議な音が聴こえた。「はちがブンブン はちブン音符／はちがブンブン はちブン音符／しぶしぶやるのが しぶ音符～」。野村が鍵盤ハーモニカをピカピカ演奏して、老若男女が歌っていた。「だじゃれ音楽って言うらしいよ」と立ち止まったおじさんが教えてくれた。

その日のワークショップで、複数の人のだじゃれをつないだ歌詞も妙に納得のいくストーリーに帰着し、音楽家のセオリーにない歌「おんぷ」が即興的に生まれた。もう1曲、「フェルマータ」に掛けた「笛るマータ」の骨格もこの日にできた。2013年3月の「千住だじゃれ音楽祭」

で、藝大生の丸田さんが着物を着て舞った、だじゃれの重箱。個人的には、戦後の日本に明るさをもたらしたCMの作曲者でもある、三木鶴郎の「冗談音楽」なども思い起した。

2013年11月の「千住だじゃれ音楽祭」は残念ながら見逃してしまったが、インドネシアの作曲家・即興演奏家、コメットさんならぬメットさんが参加し、ガムランや邦楽も飛び交ったという。本プロジェクトは、脱原発運動から出発した「ふだん会えない、意見を異にする人と対話する」というテーマが源にある。その通り、演奏者も観客も専門家に限らず、ジャンルも多種多様だ。実験的な音楽が、北千住から生まれ続けている。

また、2012年に足立市場で開催され、足立智美が芸術監督を務めた「ジョン・ケージ『ミュージサーカス』」も楽しかった。サンバ、声楽、ジャズ、マグロの解体ショーなど、演奏者やパフォーマーが同時に、それぞれの場所で、独立して演奏する。灰野敬二のパーカッションには圧倒されたが、読経も負けてはいない！歩き回る観客は、何をどう聴いて回るか、それぞれに固有の聴取体験を得る。

ケージのコンセプトである「自律した人々が中心を持つことなく、お互いを受け入れていく状況をつくり出す」ことを目指した場。タイムスケジュールについての指示系統に困難があったようだし、美術関係者のなかでは、とりとめない状態として厳しい評価を下す声もあった。

ただ、このプログラムを見ていて、「音まち」が目指すのは、音のイベントに留まらず、「音楽的状態」をつくり出すことにあるのだろうと思った。世代、好み、経験、技術、価値観、理想などさまざまに異なる人々が、それぞれ表現者となつて自分の音を出し、それがその時々の形をつくりながら流れ出し、その形は常に変化していく。ひいては、「まち」がそんな音楽的状態になること。北千住を構成する、再開発計画による駅の商業施設も、その裏にある飲屋街も、学園都市という最近の顔も、その一角で日常の用が足せる古くからある小さな商店街も、子どもたちが遊ぶ荒川河川敷も共存できるまち。「文化がない」と街を出て行った者も、外から新しい“音楽”を持ち帰り、“音楽”を発掘できる眼を養って戻ってくる。

2013年はタカラ湯で千住ミュージック

ホール番外編「歌声★浴場」を見た。男湯、女湯に分かれて脱衣所でライブが行われるなか、おばあさんたちは日課を崩すことなく、音楽を楽しみながら湯に浸かった。

同様に、住民に受け入れられなければ成立しないプログラムがいくつかある。「未来楽器図書館」をはじめとする展示作品がその支えになる。

ところで、全国各地で増えるアートプロジェクトを取材していて、アーティストとの協働は一つの手法にもなりつつあるが、最近では、街の人たちが主体となって表現する動きが生まれ始めているを感じる。触発された地元の人が表現しだし、質を懸念する声も聞かれる。だが、質は、トライ＆エラーを繰り返した先に生まれるものではないだろうか。エラーには転じて発見もある。

その点でも「音まち」には、住民が能動的にかかわるチャンスの場がある。NHK連続テレビ小説『ごちそうさん』の希子が、「焼き氷の歌」で人が変わったように、熱くて冷たい不思議なもの=アートには理屈や慣習を超える力がある。ただし、まちに変化が現れるまでに大概10年はかかる。区の継続的な支援を望みたい。

畠中実 はたなか・みのる

〔NTTインターミュニケーション・センター（ICC）主任学芸員〕

「音」は日常生活空間のひとつの要素として、あらゆる時間、空間と溶け合っている。たとえば、それは夕方子どもたちに帰宅時間を知らせるために毎日午後5時にどこからともなく聴こえてくる音楽だったり、夕飯の買い物客で賑わう商店街のそこそこで聴こえる商店からの呼び込みの声だったりとさまざまだ。こうした「音」の細部によって、「街」という全体がひとつの形を成している。ある「街」の情景が「音」の記憶とともに刷り込まれていることがある。「音」の記録は、ある時間、ある場所の記憶を、映像による記録よりもより鮮明に呼び起す。「音」による記憶とは、より映像的なものもある。

それぞれの「街」が、それぞれの「音」を持っている。カナダの作曲家、マリー・シェーファーの著書『世界の調律』（原著1977年）に書かれた、音の風景＝「サウンドスケープ」は、「音」によって世界を記述し、世界を「音」からとらえようとしたものだ。それは、ある土地に本来あった音、その環境や生活に根ざした音、その場所に特有の特徴的な音の風景を参考し、それを元に失われた、失われつつある環境を再考するという、いわば「音」

によるエコロジーの提言である。そこから、その場にふさわしい、新しい音による風景をあらためてデザインするといった環境デザインの領域に、聴覚から接近して考えるサウンドスケープ・デザイン（サウンド・デザイン）の手法が生まれた。

サウンド・デザインは80年代に日本でも、一種ブームのようにもなり、公共空間における環境整備をうながしたが、しかし、それは長期的にみると、成功したとは言いがたいのではないだろうか。「サウンドスケープ」では、ある環境から余計なものを排除し、必要なものを残し、あるいは追加する。そうやって、理想の音環境－るべき姿－を構成していくこうとする姿勢が、どこかとても人工的に、環境と乖離したかたちで作られていって印象がある。付け足された音は、その場所に根付かなければ、いずれは風化してしまうだろうし、それ自身、余計なものとして排除されてしまうだろう。

現在、「街」のような、都市空間の中の単位がこのようなサウンド・デザインを試みるとするなら、その「街」の風土や生活に根ざした、それらとともにある／ありえるような「音」の活動を、もうい

ちど「街」の活動の中に組み込んでいく、いわば「音」による環境づくりということが考えられるのではないか。それは、いわゆる従来あったようなサウンド・デザインや環境音楽のようなものではない。すでにある「街」の上に外側から「音」のペールを被せてしまうようなものではなく、もっと「街」の活動の中から生まれてくる、活動によって生成される、営みとしての「音」であるはずだろう。だから、それはけして「音」そのものを「街」に実装していくことだけにとどまらない。活動体としての「街」が生み出す「音」が形成する環境ということなのではないだろうか。それは、つねにそこで起こる出来事として生じるものであるはずだ。

この「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」は、こうした観点から、「街」と「音」との関係とその可能性を考える上で、国際交流、市民参加といった地域振興のアートプロジェクトということを超えて「音による街づくり」という側面が見えてくるのではないか。たとえば、歴史的文化的な価値をみとめられた建物などは保存されていく（場合がある）よう

に、人々の生活の中に浸透した「音」による出来事とその記憶を残していく方法はあるだろうか。さらには現在の「街」の環境の中に、新たな「音」の出来事を装填し、「街」を印象づける構成要素を作り出すことは可能だろうか。それは、こうしたアートプロジェクトが避けがたく持ってしまう、実際の地域社会との違和をどのように乗り越えるかという課題と結びつくような気がする。

ささやかな「音」が、時間をかけて地域社会に浸透していくようなプロジェクトを夢想してみる。それぞれの「街」には、それぞれの「音」の風景がある、という謂いになれば、「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」におけるさまざまな営みは、時間をかけて「街」の風景になっていくかもしれない。それが、徐々にある共同体の中で育まれ、その「街」の名物になる、といったようなヴィジョン。本来「音」や「音楽」はそのようにして長い年月をへて、変化しながらも継承されていくものであるだろう。そのとき、「街」は「音」のための単なる舞台ではなく、それが育つ土地であるということになるだろう。

## 縁もゆかりも

清宮陵一 きよみや・りょういち

[「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」ディレクター]

千住にはそもそも縁があった。その昔、父方の実家がこのまちにあった。ものごころもつかない小さな頃に毎週末のように遊びに来ていたこのあたり。「音まち」に関わるようになって約30年ぶりに訪れるようになり、当時では考えられないような巨大な駅と商業施設に、賑やかないくつもの商店街に驚きながらも、一步路地を入れば懐かしい雰囲気がそこかしこに残っている。実家はとうの昔になくなってしまったが、家の近くにあった何かが見つかるかもしれない。実家の後に建てられた家を探してられるかもしれない。新たなイベント会場を探すために千住を歩く時は、いつもそのことを気にしていた。

たくさんのシャボン玉が日差しに照らされて光に満ち溢れる空間、凧が揚がるにふさわしい電線のない風の真っ直ぐ吹く広場、だじゃれを言いそうなおやじたちがわらわらと生息する呑み屋、ヒップホップというカルチャーをありのまま許容してくれる匂いのする場所……。

『しゃポンおどり』の歌詞にもある通り、荒川と隅田川に挟まれたレモンのよ

うなかたちをしているこの地域でこれまで3年間、たくさんの「場」を探してきた。場所へのこだわりは実家探しという個人的な感傷もあって、とても深く強かったように思う。

あるとき、「Memorial Rebirth 千住」を行なうにあたって開かれた地域説明会にて、こんな質問が出た。「このイベントはいったい誰のためにやるんですか?」

私は一瞬言葉に詰まった。作家がいて、演奏者がいて、パフォーマーがいて、運営スタッフがいて、お手伝いしてくれる方がいて、お客様がいて、主催者がいて。把握しきれないほどたくさんの人々が関わっていて、その誰もが楽しめる場をつくりたいし、つくらなければいけないと思ってやってきた。でもその時、とっさに口をついて出た言葉は「運営する側がみな同じ意見かはわからないが、私はこの学校に通っている子供たちにとって、一生忘れられない時間をつくりたい」だった。それが正しい答えかどうかは正直、今でもわからない。でも、この言葉を発した時こそ、大切なのは「場」ではなく「人」なんだ。どこでこのイ

ベントをやるかではなく、誰のためにこのイベントをやるのか、ということにきちんと意識を向けていかなければ改めて実感することができた瞬間だった。

それからは、ちょっと前のように実家の思い出を探すこともなくなった。なので、これで時効成立かな、と思い、あえてこれまで聞かなかったことを親に尋ねてみた。

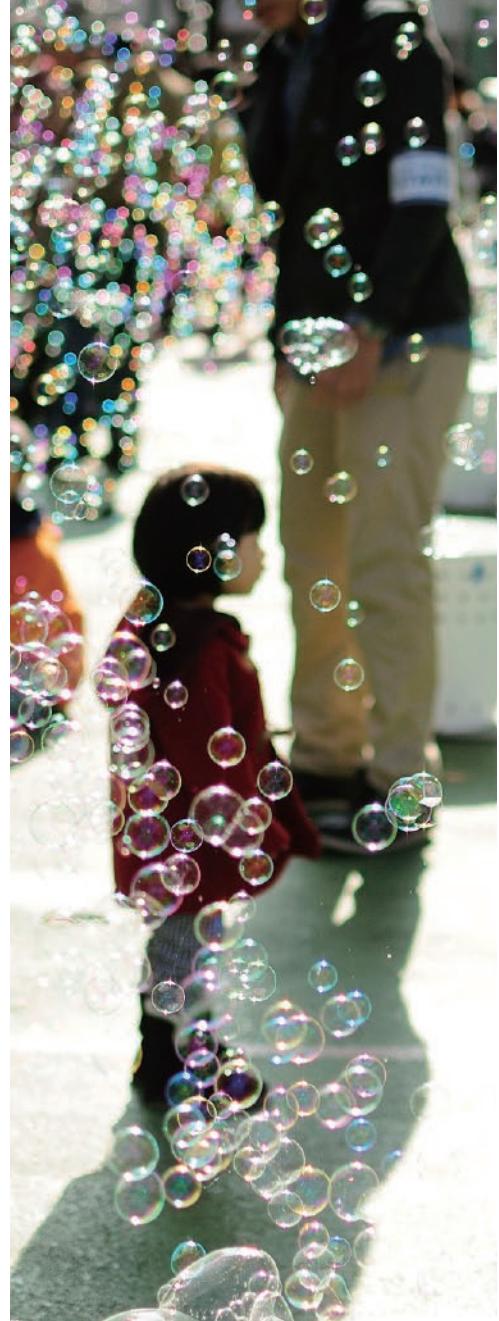
「昔、千住に実家があったじゃない？ あそこの住所って覚えてる？ 教えてくれないかな？」

「はいはい。駅からちょっと遠かった記憶があるね。えー、住所ね。あったあった。えーっと、荒川区南千住……」

「あれ、北千住じゃないの??」

「違うよ。南千住だよ」

まいった。完全に勘違いしていた。そりや、どれだけ探しても北千住で実家の面影が見つかるはずがない。と思ったのだが、まあ、いいや。「音まち」に関わることで、実は縁もゆかりもなかったこの足立区千住の人々と、一生忘れられないたくさんの縁を新たに得られたのだから。



Memorial Rebirth 2012 千住本町  
(2012年11月24日、足立区立千寿本町小学校)

# 大友良英 + チーム・アンサンブルズ

Otomo Yoshihide + Team Ensembles

## 千住フライングオーケストラ

2011-

大友良英と公募で集まったチーム・アンサンブルズが

「空から音が降ってくる演奏会」を目指すプロジェクト。

自然に左右されながらも、誰も見たことのない音楽空間づくりに挑み続ける。



凧を揚げると空の高さと青さに驚き、眩しさに目を細める。

風の強さに身を縮め、風が止まれば凧が落ちないかとハラハラする。

地上で鳴り響くチャンチキのリズム、管楽器の突き抜ける音、愉快なメロディ。

大友の指揮に合わせ大勢の演奏者が奏でる音楽に体を揺らしつつ、

上空を見上げると、凧から鈴の音色やノイズが降り注いでくる。



空飛ぶオーケストラ大実験——千住フライングオーケストラお披露目会  
(2012年3月20日、荒川河川敷 虹の広場)



「千住フライングオーケストラ」で使用している大型凧を  
上空で安定させて飛ばすには、風のタイミングを掴むことが必要だ。  
強く吹いた瞬間、ふわりと風にのせるように手を離す

「千住フライングオーケストラ」は上空から音が降ってくる演奏会を目指し、チーム・アンサンブルズと大友良英が構想した演奏会だ。『音楽家ではない人と、演奏しないバンドを組んでみたい』という大友の呼びかけで集まったチーム・アンサンブルズの多くは、音楽の“非専門家”な人々だ。彼らと大友は、企画を0から考えるために、まちを巻き込みながら一般の方も参加できるような枠組みを丁寧に話し合いながら探っていった。

そんな中、戦前には凧が千住の名物になるほど専門店があったこと、そして今でも凧揚げ大会が行われていることを発見したメンバーがいた。昔、良い風が吹いたら河川敷に出向いて凧揚げをするこ

とは大人の嗜みだったそうだ。その発見をきっかけに、音の出る凧で演奏会を行う「千住フライングオーケストラ」という企画が生まれた。

空から音が降ってくる夢は壮大だが、実際に凧で音を出すのは本当に難しい。日本にもセミ凧や津軽凧など、うなりを用いた音の鳴る凧は伝統的に存在するが、とてつもなく強い風が吹かなければ音は出ない。「千住フライングオーケストラ」は日本の凧の会・足立支部の協力を得て、凧揚げの練習や、音の鳴る凧の開発に試行錯誤していった。

そして“非専門家”だったチーム・アンサンブルズは次第に“専門家”になっていく。軽量のウインドチャイム、音程の

変わるブザー、沢山の鈴を詰めて割る美しいくす玉……。凧に付けて揚げるこれらは、すべてチーム・アンサンブルズが考え出したものだ。軽やかに鳴る鈴の音から耳をつんざくような電子音まで、「千住フライングオーケストラ」が生まれたときには想像さえできない音の広がりが生み出されていた。

浅草での「すみだ川音楽解放区」や福島での「フェスティバル FUKUSHIMA!」、東京国立近代美術館での「one day ensembles」など、大友が出演するアートイベントに遠征する合間に、徐々に音が鳴るシステムを開発していった。“非専門家”だからこそさまざまな発想が飛び出し、次々と発展させていきながら、音と凧と空が

絡み合う美しい情景をつくり出したのだ。音の鳴る凧の演奏会はひとりではできない。風を読み、凧糸と凧を持つ相手と息を合わせ、タイミングよく手を離すと、凧はふわりと空に向かう。人が凧を見上げて感動するのは、凧に乗せた強い気持ちや振り注ぐ音と共振するからなのかもしれない。

今や空から音を出す仕掛けには、空気から音が滲むような幻惑的な雰囲気を生む音の鳴る提灯や、凧糸の振動から音を拾うものまで生まれている。「千住フライングオーケストラ」の夢は、まだ続いている。

[松浦史子]

11フィートもの大型凧には特製ウインドチャイムを。  
風の動きを音で聞かせてくれるこのウインドチャイムは、  
特別な軽い素材でできている



虹色の凧がいくつも空に飛ぶさまは、  
スカッと気持ちよく、目が眩むほど美しい。  
鐘の音は凧糸を伝ってカラカラーンと降り注いでくる



大卷伸嗣

Ohmaki Shinji

## Memorial Rebirth 千住

2011

無数のシャボン玉によって、見慣れたまちなみを光の風景へと

変貌させるアートパフォーマンス作品。

千住地域をリレーしながら、参加者の輪を広げ、さまざまな縁をつなげていく。



初めての開催は、雨の降る肌寒い3月だった。

近所に住む子供たちが色とりどりのレインコートに身を包み、会場の千住いろは通り商店街を訪れ、

雨空に透き通るシャボンに彩りを加えてくれた。

冷たい雨の中、何より集まった人々の笑顔に心が温まる、かつての賑わいの記憶が蘇るひと時。



Memorial Rebirth 千住いろは通り  
(2012年3月17日、千住いろは通り商店街)

現代美術家の大巻伸嗣による「Memorial Rebirth (メモリバ)」は、無数のシャボン玉で見慣れた景色を変貌させ、記憶を呼び起こし、新たな記憶を創り上げるアートパフォーマンス作品である。これまで国内外のさまざまな場所で展開されてきたが、大巻は千住での「メモリバ」は一度きりにはせず、地域から地域へリレーのバトンのようにつないでゆくことを願った。回を重ねるごとに、縁が結ばれていきますように——。

1年目は千住で初めての試み。右も左もわからない「音まち千住の縁(音まち)」のスタッフはいろいろ通り商店街をはじめ、多くの地域の方々に支えられながら準備を進めていった。“千住で「メモリバ」をリレーする”というイメージを抱えて臨んだ2年目、地元の人と一緒に選んだ場所は、千寿本町小学校の校庭。いろいろ通り商店街から、小学校近くの千住五町会へ、メモリバの「引き渡し式」も開催された。この年は、「シャボン玉+盆踊り=しゃボンおどり」なる新たなアイディアが登場。盆踊りの盛んな千住で、もっと参加者同士がひとつになれるようにという大巻の発案から、新しい盆踊りを制作した。振り付けは、東京藝術大の卒業生のグループ「くるくるチャーミー」と千住の日本舞踊の先生が協働で行い、シャボン玉を追いかけたりつかまえたりする振りの、世界にひとつだけの盆踊りが完成した。

千寿本町小学校の校庭には、中央に大きなクスノキが生えている。その木を開むように、会場いっぱいに広がるしゃボンおどりの輪。光を受けて色とりどりに染まるシャボン玉に包まれて、晴れやかな空に、みんなの記憶が昇っていくようだった。

2013年の第3回、回を重ねるごとに新たな挑戦を続ける「メモリバ」。今回のチャレンジは、夜の開催だった。<sup>じょうとう</sup>常東地区での開催で、千住の東側と西側がひとつになる1日を生み出す大きなチャンスにしようと、前回の踊り手の方々に加え、新たに常東地区の踊り手のみなさんにも声をかけた。

また、シャボン玉と踊る人々を照らし出すため、千住にある東京電機大学の井筒正義先生と学生たちに協力を依頼し、夜の校庭と校舎にプロジェクターで映像を投影する共同企画が実現。投影する映像は、ワークショップを開催し、公募で集まった参加者が「私の千住」をテーマに撮影した写真を使って制作した。

そして開催当日。宵闇に輝く無数のシャボン玉の中で、輪になって踊る人々。夜の校舎や校庭一面に投影される映像は、シャボン玉をさまざまな色模様に照らし出し、夜の「メモリバ」をより華やかに賑やかに彩った。

[エレナ・ブジョラ、中村久仁子]

野村誠

Nomura Makoto

## 千住だじゅれ音楽祭

2011-

だじゅれ（駄洒落）から生まれる新たな音楽「だじゅれ音楽」の可能性を探求するプロジェクト。

“駄”こそが大事なんだ！とさまざまな人を飲み込みながら、

抱腹絶倒なコンサートを展開。

たとえば、「猫が寝転ぶ」というだじゅれ。「猫」と「寝転ぶ」ことには何の関係もない。

でも、まったくつながらなかったもの同士が、音によってつながる。

これって、芸術の本質を、だじゅれ自体が体现していることにはかならないんですね。<sup>\*1</sup>

僕が勝手に「だじゅれ音楽」という名前だけを作ったんですね。

すると、この言葉、人によって多様なイメージを持つんですよ、そこが面白い。

だから、一つの意味に限定せずに、だじゅれ音楽とは何なのか僕も考えているし、

皆もそれぞれ勝手に考えてる。

「これもだじゅれ音楽かもしれないな」「そっちもあり？」

とか色々と見つけていければいいなと思っているんです。<sup>\*2</sup> —— 野村誠

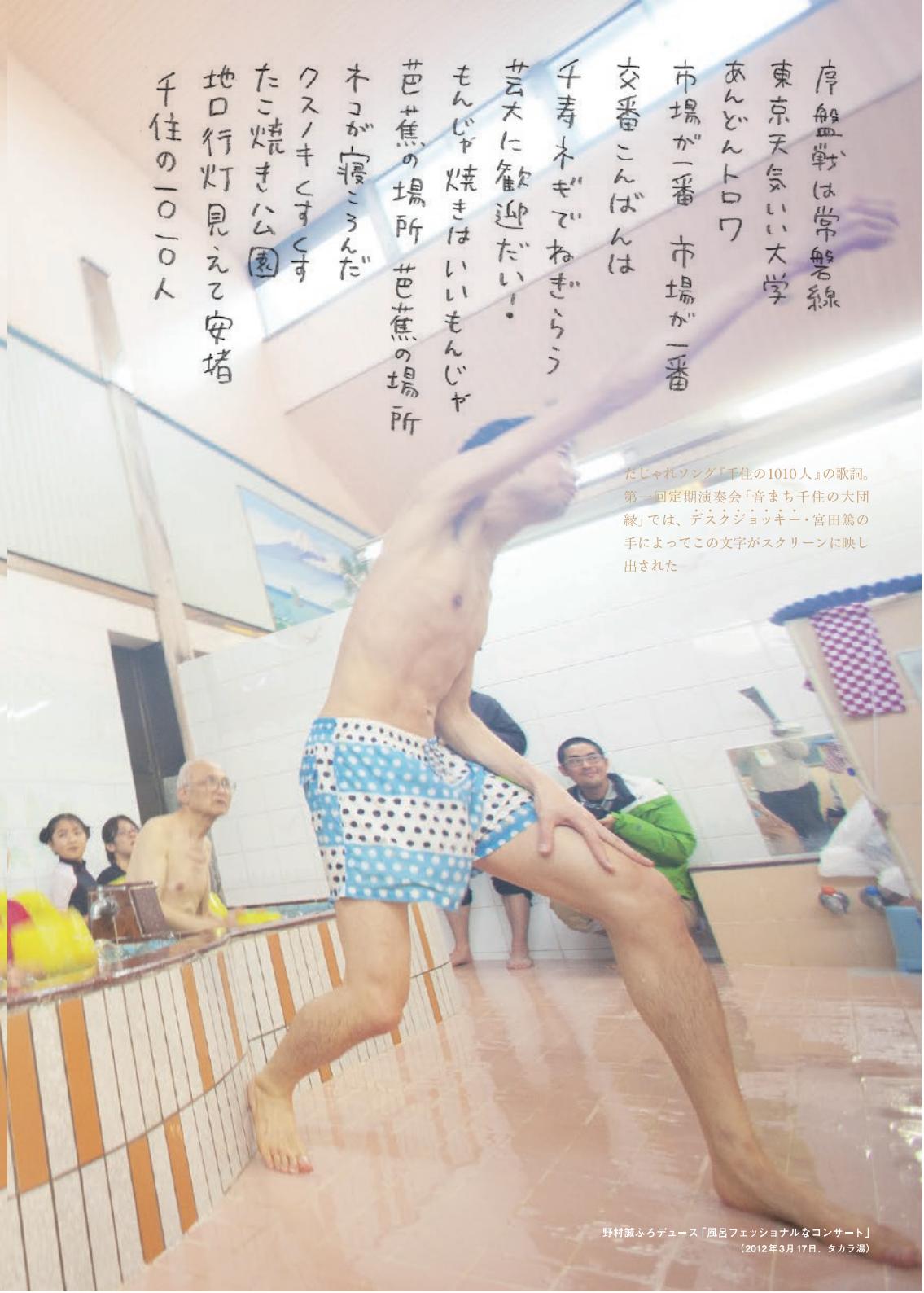
\*1 「季刊ホームシアターホワイエ」2013年(春号)掲載インタビュー記事より

\*2 白坂ゆり | 「音」は人や街を変えることができるのか?「音まち千住の縁」Vol.3  
作曲家・野村誠、日本が変わるために「だじゅれ音楽」でおじさんとコラボ  
CINRA.NET (<http://www.cinra.net/column/otomachisenju03-nomura.php>) より



序盤戦は常磐線  
東京天気いい大学  
あんどんトロワ  
市場が一番 市場が一番  
交番 こんばんは  
千寿ネギでねぎらう  
サ云大に歓迎だい！  
もんじゅ焼きはいいもんじゅ  
芭蕉の場所 芭蕉の場所  
木コガヘニうんた  
クスノキくすくす  
たこ焼き公園  
地口行灯見えて安堵  
千住の一〇一〇人

だじゅれソング『千住の1010人』の歌詞。  
第一回定期演奏会「音まち千住の大団  
縁」では、デスレジョッキー・宮田篤の  
手によってこの文字がスクリーンに映し  
出された



野村誠ふろデュース「風呂フェッショナルなコンサート」  
(2012年3月17日、タカラ湯)



「フェルマータ」という音楽用語がある。「その音をのばす」という意味で、「停止」という意味のイタリア語からきているらしい。しかしこの言葉、よく見ると、その中にさまざまな日本語が隠されている。「笛」「増える」「待った」「舞った」……。そんなだじゃれ的発想から、どんな音楽が奏でられるのか、あれこれ試す。演奏者が「笛」を吹き、誰かが「待った」をかけたとき、一斉に「フェルマータ」。この流れを繰り返しながら、「笛」を吹く人が「増え」ていく。やがて、スタッフの「丸田」さんが登場し、「舞い(舞った)」、最後に奏者全員でフェルマータのかたちになつて礼。こうして作曲されたのが、「だ

じゃれ音楽」の代表作『笛るマータ』だ。

だじゃれ音楽は、誰かがアイディアを出せば出すほど、その意見を吸収して発展を遂げる。そして、その途中で生じる意味の飛躍は、まったく予想だにしなかった発想をもたらすことも多い。

しかし、だじゃれをはじめとした「駄」なものは、一般的には蔑まれたり、無視されたりしがちなものである。僕たちは、千住のまちなかで「だじゃれを言ってください！」と突撃インタビューを敢行したものの、苦笑いとともに「私はだじゃれなんか言わないよ」「それどころじゃない」など、だじゃれを言わない言い訳ばかりが集まってしまった。このインタ

ビュー映像は、千住だじゃれ音楽祭第一回定期演奏会「音まち千住の大団縁」で、『だじゃれは言いません』という曲になった。インタビューの中の「言い訳」の抑揚を、そのままヴァイオリンソロが美しい旋律にして映像と重奏する。「駄」などの闇を、ヴァイオリンの奏楽に昇華させたこの作品は、東京藝大の松原勝也教授の華麗な演奏に聴衆が爆笑するという、不思議な光景を生み出した。

「飛躍」と「疎外」の狭間で揺れながら、僕たちは、新しいだじゃれ音楽のかたちをつくり続けている。

[石橋鼓太郎]

The musical score consists of two staves of music for violin. The lyrics are written below the notes in Japanese. The score includes measures 3 through 28, with lyrics such as 'はちがぶんぶん', 'はちがぶんおんぶ', 'ふしふしやるのがしぶおんぶ', 'じふじふするのが', 'ぶおんぶにぶいあなたはにぶ', 'じふおんぶにぶいあなたはにぶ', 'ぶんぶ', 'いしのうえにむかわいしの', 'まつらかつや', 'りえにむかわいしのうえにむかわいぶ', and 'も お ク セ る ぶ'.

だじゃれソング『おんぶ』の楽譜。2012年10月に開催された「あだちグルットウォーキング」にて、道行く人から音楽にまつわるだじゃれを集め、それをもとに野村がその場で作曲した

「千住だじゃれ音楽祭 第一回定期演奏会「音まち千住の大団縁」  
(2013年3月16日、東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール)



ぬお  
2011

足立智美が、足立区の足立市場でのコンサートのために作曲した「ぬお」。公募で集まった約64名の器楽、合唱、チューバ隊が、「あだち」を基調とした音を奏でた。



雨上がりの雲間から光が差し込む足立市場。名物「ねぎま鍋」の香りが漂う中、10本のチューバが並ぶ。後ろからさまざまな楽器を持った人々が練り歩いてくる。悲鳴にも似た声が降ってきたと思うと、合唱隊がこちらを見下ろしている。敷地内を動き回る演奏者たちがチューバのもとに寄ってきた。拡散していく音が駐車場の屋根の下に集まり、「ラ(A)・レ(D)・ラ(A)・ド(C)・シ(H)」というひとつの塊となって飛んでいく。曲の大団円を飾った「セリ」の声の余韻に浸りながら、闇に沈む夕日を眺めた。コンサートの高揚感を象徴するかのようなオレンジ色。

仕掛けられた即興と「聴く」という行為の拡大、それが『ぬお』である。

魚市場の敷地内で増築を重ねた建物群の高低差をもとに、演奏者たちが配置された。次々と飛んでくる音の正体が見えないため、聴衆は音がする方へ足を運ぶ。あちこちで同時に演奏が繰り広げられ、音空間が拡大していくにつれて、どの場所でどんな音を聴くのか自ら選び取るのだ。聴衆が、すべての演奏者を一望できるコンサートホールとは真逆の発想が、『ぬお』という音の場だった。



## ジョン・ケージ「ミュージサーカス」

2012

実験音楽の祖、ジョン・ケージが1967年に発表して以降、世界中で行われているコンサート形式。

足立は芸術監督として前年に続いて魚市場の特殊性を活かした場をつくり上げた。



足立市場が大勢の人で溢れている。すると、突然隣の人が時計を気にしながらパフォーマンスを始めた。そのとき初めて、その人が出演者だと認識する。こちらで何か始まったと思うと、よそでも始まり、やがて終わる。同時多発的にどこかで誰かがパフォーマンスをしているが、それに規則性はないようだ。ダンスする人、読経する人、講義する人、歌う人……。ここではずっと地面に人が寝転がっている。魚市場という世界の中に、多くの事柄が各々の時間軸で生まれ、消えていく。ひとつの社会の中に生きる「私」を見た気がした。

ジョン・ケージ生誕100周年のこの年。市場の特殊空間に惚れ込んだ足立が、「ぬお」に続いて「ミュージサーカス」を題材とした。

この音空間には、「良いハーモニーになった」とか、「コラボしたことで新境地が生まれた」という達成感や歓喜は生まれない。それは演奏者にとっては苦しい状況だろう。だが、それを目撃した聴衆がふと我に返って、「そういえば世の中ってこうだよな」と受け止められたとしたら。その「気づき」と「なぜだか納得してしまう感覚」こそが「ミュージサーカス」なのかもしれない。 [宮下信子]



# 《ぬお》から《ミュージサーカス》へ

足立智美

あだち・ともみ

この原稿を頼まれたので、「音まち千住の縁」がいまどうなっているのか、インターネットで調べてみた。《ぬお》が「音まち千住の縁」最初のパフォーマンスだったわけだが、《ミュージサーカス》以降、この1年間は関わりをあまり持たなかつたし、そもそもあまり日本にいなかったので、何が起こっていたのかはほとんど知らない。写真に写っているスタッフの顔の多くは見覚えがなかったり、見知らぬ場所でさまざまなことが起こっている。私のやったことはかなり過去に押しやられているが、それは仕方ないことだろう。とはいえ、《ぬお》と《ミュージサ

ーカス》の残響がいくつかの企画から確実に感じ取ることができてうれしい。どちらの企画も足立市場という場所抜きではありえなかった。《ぬお》のようなサイト・スペシフィックな（=特定の場所のための）音楽作品というアイデアは1995年に渋谷駅東口歩道橋でおこなったパフォーマンス以来、アサヒ・エコアート・シリーズの《四万十神楽交響楽》などを通して温めていて、まさに、というタイミングでこの場所に出会うことができたことは本当に感謝したい。全体を見渡すことのできない建築構造、さまざまな残響、かすかな匂いの層が重なりあ

っていく環境はそれ以上ないものだった。《ミュージサーカス》は本来どんな場所でもなりたつ考え方ただけれども、ある程度以上の規模でやろうとしたら都内ではそれほど可能な場所は多くない。やっぱり足立市場での《ミュージサーカス》は他ではありえないユニークなものだった。

あの場所が「市場」であることはシンボリックな意味以上のことがあると思う。さまざまな背景を持つ人達が一時的に集まり、アイデアを交換してまた散っていく。私の知らない所で想像しなかった形で何かが生まれると期待する。何度も言ったことだけれども、芸術に世の中

に対する即効性を期待してはいけない。1年や2年の尺度で芸術を考えてはいけない。芸術なんてささやかなものだけれど、ささやかなものの中に未知の世界があると信じられることはいつだって大事なのだ。そんな意味でも多面的な記録が残ることは重要だ。あの体験はあの場所、その時だけのものだけど、やったことは多分に誤解を含んで伝わっていく。そして誤解が次の創造を産み出すのだ。たとえそれを創造と呼ばなくとも、芸術でなくてもいい。生活の中に何かがゆっくりと浸透していく。そういうものだと思う。



東京都中央卸売市場 足立市場



スプツニ子！

Sputniko!

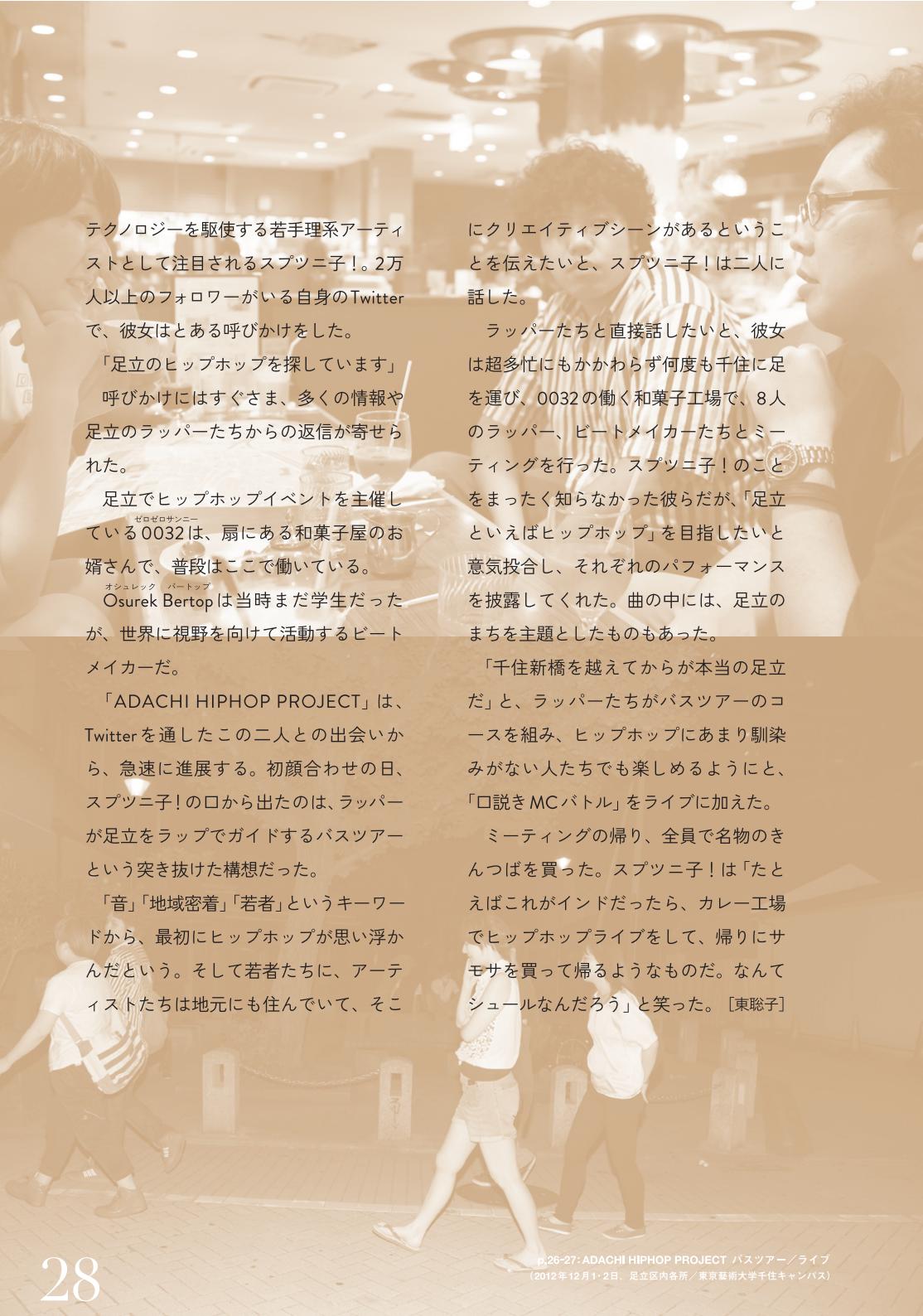
ADACHI HIPHOP PROJECT

2012 -

「『アート』はまちの中に既にある！」と、現代アーティスト・スプツニ子！が  
足立のローカルヒップホップカルチャーに着目したプロジェクト。  
地元ラッパーがガイドするバスツアーとライブを開催した。

BUS TOUR





テクノロジーを駆使する若手理系アーティストとして注目されるスプツニ子！。2万人以上のフォロワーがいる自身のTwitterで、彼女はとある呼びかけをした。

「足立のヒップホップを探しています」呼びかけにはすぐさま、多くの情報や足立のラッパーたちからの返信が寄せられた。

足立てヒップホップイベントを主催している0032は、扇にある和菓子屋のお嬢さんで、普段はここで働いている。

オショレック バートップ  
Osurek Bertopは当時まだ学生だったが、世界に視野を向けて活動するビートメイカーだ。

「ADACHI HIPHOP PROJECT」は、Twitterを通じたこの二人との出会いから、急速に進展する。初顔合わせの日、スプツニ子！の口から出たのは、ラッパーが足立をラップでガイドするバスツアーという突き抜けた構想だった。

「音」「地域密着」「若者」というキーワードから、最初にヒップホップが思い浮かんだという。そして若者たちに、アーティストたちは地元にも住んでいて、そこ

にクリエイティブシーンがあるということを伝えたいと、スプツニ子！は二人に話した。

ラッパーたちと直接話したいと、彼女は超多忙にもかかわらず何度も千住に足を運び、0032の働く和菓子工場で、8人のラッパー、ビートメイカーたちとミーティングを行った。スプツニ子！のことをまったく知らなかった彼らだが、「足立といえばヒップホップ」を目指したいと意気投合し、それぞれのパフォーマンスを披露してくれた。曲の中には、足立のまちを主題としたものもあった。

「千住新橋を越えてからが本当の足立だ」と、ラッパーたちがバスツアーのコースを組み、ヒップホップにあまり馴染みがない人たちでも楽しめるようにと、「口説きMCバトル」をライブに加えた。

ミーティングの帰り、全員で名物のきんつばを買った。スプツニ子！は「たとえばこれがインドだったら、カレー工場でヒップホップライブをして、帰りにサモサを買って帰るようなものだ。なんてシュールなんだろう」と笑った。〔東聰子〕

p.26-27: ADACHI HIPHOP PROJECT バスツアー／ライブ  
(2012年12月1・2日、足立区内各所／東京芸術大学千住キャンパス)

## ASA-CHANG

ASA-CHANG

### 音まち子どもパラダイスオーケストラ 2012

パークッシュニスト・ASA-CHANGが、地元の子どもと歌と楽器で共演。

本番までに練習を重ね、あだち区民まつり「A-Festa」のオープニングステージを飾った。



千住に住むお父さんが発したひと言が、ずっと気になっていた。

「おまえらのやっていることはよくわからん。もっと子どもたちのためになるようなことをやって欲しい。」

あだち区民まつり「A-Festa」に「音まち」も参加しては、と区から打診を受けたのは、その少し後のこと。「絶好のチャンス！」と、打楽器奏者の枠を常にみ出す音楽家・ASA-CHANGに、未就学児たちと一緒にステージに立って欲しいと打診。快諾とともに二つの提案を受けた。「教えるのではなく同じ立場で、みんな一緒にミミズ目線(！？)で臨みたい」「楽団名はASA-CHANG & 音まち子どもパラダイスオーケストラ」。そう、ASA-CHANGは、かの東京スカパラダイスオーケストラの創始者でもある（現在は脱退）。

合唱曲『虹』をベースにした歌と打楽器のパフォーマンス。ど真ん中で「グワッシャ～～ン」とシンバルで指揮するASA-CHANG、その周りを精銳コンガっ子隊、さらにその周りを鈴やタンバリンをシャンシャン鳴らす部隊が、歌いながらみんなで大行進。子どもたちの真っ直ぐなパワーをファンファーレに、音まちメイン会期が幕を開けた。

〔清宮陵一〕